

芸術・文化と地域づくり

松木 鉦 祐

最近、最上地区芸術文化団体協議会総会と田川地区芸術文化懇談会に参加する機会を得た。各地区の活動状況が報告されたが、概ね地区の芸術文化活動は活発だ。活動するジャンルでいえば、これまでの華道・茶道・書道・絵画・郷土史研究などに加えて新舞踊・社交ダンス・大正琴・カラオケなどが増えてきた。市町村別では少ないところで二十団体以上、多いところでは六十以上の団体が活躍している。当然、公民館や公共施設はフル活動している。

この例だけでも、芸術文化への県民の接し方が変わってきたことがわかる。鑑賞するだけではなく、自ら参加することで楽しみを倍加させている。「見る」「聞く」から「体験する」方向に変わってきたと言える。

これは素晴らしいことだと思う。自分が舞台上に立ち脚光を浴びれば、自信が付いて、より積極的になる。そうすれば、日々の学習が楽しくなり、友達も増える。人とのつながりが深まり、新しいコミュニティが形成されていく。

このエネルギーを増幅させ、地域を活性化

するためには行政がちょっとばかり手を貸してほしい。芸術・芸能・文化活動というものは、日々継続することによって、能力が向上する。このために、参加者は忙しい時間を割いてかかさず学習・研修にやってくる。ただ問題なのは、能力の向上という目的だけでは力が入らない。常に、成果を発表するという目的を持つことで日々の学習・研修に熱が入ると言えよう。どのくらいレベルアップしたか本人も確認したいし、他人にもその成果を紹介したい。そうすることによって仲間を増やすこともできる。そのための機会を作って頂きたい。

たとえば、役場のロビーを展示コーナーにする。銀行にも展示コーナーをお願いする。そうすれば、華道・書道・絵画・民芸などをやっている人は熱が入る。郷土史研究や民話グループ・山野草研究グループなどには印刷費の補助を出し研究成果を発表させる。音楽舞踊・演劇・郷土芸能などは秋の芸術祭・文化祭だけでなく町や村の行事のなかに組み入れる。春の芸術祭・文化祭も面白い。いずれにしても、個人では出来ないところをフォロー

してほしい。

私は、先日、生涯学習推進セミナーに参加させていただいた。そこでの感想だが、関係者の生涯学習の理念が高邁で、なにか地についでいないように感じた。農業問題・環境問題・過疎対策・教育問題など住民の意識を開発し、まちづくりへ参加させようという啓蒙的意識がにじみでている。生涯学習の学習に重きを置きすぎるのではなからうか。もっと人々が参加したくなるようなものでなければならぬ。芸術・文化というものは、そもそも楽しいものなのである。カルチャーというと生涯学習の本流ではないようにとらえているが間違いだと思う。たしかに、カルチャーだけに参加する人は視野が狭く、自分たちだけの世界しかもたないと批判される。ところが考えようによっては、この人たちが最も日々楽しんでいることはまちがいない。

いま、多くの町村において問題なのは人口の流出、高齢化の進行、農家の後継者不足などであり、その結果、地域コミュニティが成り立たなくなる恐れがあることである。地方自治体では、当然、人口増を最大の目標に掲げている。しかし、地域の活性化はそれだけではない。たとえ人口は少なくとも、そこに住んでいる人々が、目標を持ち生活が生き生きとしていれば魅力ある地域と言える。

一村一品運動の提唱者だった大分県の平松守彦知事はこう言っている。「過疎は怖くない。怖いのは心の過疎である」。

(フリープロデューサー・山形市在住)